

ジャガ芋

戸張 芳子

ゲンの家には広い庭があります。その庭は、いつもおいしい果物やきれいな草花が、いっぱいです。

春に桃の花が咲くとお父さんは「今年もおいしい桃が食べられるぞ」と嬉しそうです。ゲンはきれいな花がどうしておいしい桃になるのか、とても不思議でなりません。そんなゲンの顔を見たお父さんは「よし今年もゲンにも手伝ってもらおう」と言いながら、ゲンの肩をポンとたたきました。ゲンは「ぼくは何を手伝うの」と聞きましたが、お父さんはニコニコ笑って「いいかげんはいけないぞ、途中でやめるのもだめだな、何ごとも最後までちゃんと面倒をみるんだぞ」と少しこわい顔で言いました。ゲンは何かなんだかわからないまま「はい」と約束してしまいました。そうです。ゲンは毎年食べるおいしい甘い桃が大好きで、今年も食べたいと思いい元気に大きな声で返事をしていました。



こうしてゲンは桃の実がおいしく実るまでに、お父さんにいろいろなことを教えてもらいました。今年も薄桃色のみずみずしい桃を家族みんながおいしく食べられたのです。特に末っ子のヒロはまだおしゃべりができませんが、お母さんが桃を食べやすく切ってお皿に盛ると、すぐにハイハイでテーブルに近寄り「ウマーウマー」と、よだれを出しながら大きく口をあけて「早く食べたい」のポーズをします。これも、お父さんがいつも大事に育て、ゲンもそれを手伝ったからだ嬉しくなりました。

こうしてゲンの家族みんなはいろいろの果物が実るとおいしくいただくのでした。

ある日「これは小鳥の分だな」と言ってお父さんは少しだけ桃の実を木に残しました。おいしい桃です。「ぜんぶ食べたいのに、どうして小鳥にも食べさせるの」とたずねるゲンに「これがお父さんのやり方だよ」とニコニコ顔でこたえるお父さんです。トマトの時もそうでした。柿が実った時も同じでした。小さい金色の金柑の時も同じ。こうしてゲンの家の庭はいつも小鳥が集まってくる果物や花いっぱい庭なのです。

「来週は土日と連休だな、よしおじいちゃんのごきげん伺いに出かけよう」と言うお父さんの声にみんな大喜び。ゲンはもう来週の土曜日が待ちどおしくなりません。ゲンはよくよく考えて、おじいちゃんへのお土産はお父さんに教えてもらった「お手伝いにしよう」と決めていました。「いいかげんはいけないぞ、途中でやめるのもダメだな、何ごとも最後までちゃんと面倒をみるんだぞ」とお父さんに言われたことを思い出していました。

待ちに待った土曜日、おじいちゃんの家にはおばあちゃんもいます。二人はニコニコと嬉しそうな顔。もちろんゲン一家もみんなニコニコ。嬉しい顔がいっぱいのおじいちゃんとおばあちゃんの家です。でも疲れたのか末っ子のヒロだけはすやすやお昼寝の顔。しばらくぶりのお話がたくさんたくさん。それが終わると突然おじいちゃんが「ジャガ芋の収穫に出かけようかな」と支度をはじめました。ゲンは嬉しくて「おじいちゃん、ぼく手伝うよ」とおじいちゃんのことについて畑へ出かけて行きました。

ゲンはお父さんの手伝いをした時と同じように、おじいちゃんからいろいろなことを教えてもらいました。おじいちゃんにかわいがられた畑のジャガ芋は、どれもぷっくりふくれたゲンのまんまるほっぺと同じ丸いぷっくりの形。おじいちゃんの手もゲンの手もジャガ芋も畑の土で泥だらけで泥の色。ジャガ芋にやさしい、土のおふとんは泥の匂い。土の中から出てきたジャガ芋は、はじめて見たお日さまに驚いたのか、ちよっぴり白い顔。ゲンにとっては嬉しい楽しい「おじいちゃんとジャガ芋と泥だらけとお



日様とやさしいそよ風との忘れられない楽しい時間」でした。「そろそろおしまいでしょう」とおじいちゃんはジャガ芋を集めて家に持って帰る支度をはじめましたが、小さいジャガ芋を少しだけ畑に残しました。ゲンはお父さんのやり方を思い出して、「これはおじいちゃんのやり方でしょう」とたずねると「そう、おじいちゃんのやり方じゃ、よく知ってるな」とおじいちゃんは感心したようです。お父さんの手伝いをしているゲンには簡単にわかることでした。「お父さんのお父さんだからよく似てるんだな。でもあのジャガ芋をだれが食べるのかな、土の中のみみずかな、森に住むうさぎかな」といろんなことを考えながらおじいちゃんの後について家

へと急ぎました。

ゲンはその夜はおじいちゃんの部屋で寝ることにしました。「おやすみなさい」のあいさつをしたゲンは、もう一度起き出して「おじいちゃん手を見せて」とおじいちゃんの手をとると「あっ、お父さんと同じ」と思いました。昼間とちがってちよっぴり石けんとお風呂の匂いがしました。何も知らないおじいちゃんは「どうしたのかね」と不思議そうな顔。「ううん何でもない」とゲンは安心しておふとんの中へもぐり込みました。「ぼくの思ったとおり、大きくてあたたかくってお父さんによく似た手、ぼくの好きなお父さんと同じ手だった」とおふとんの中で聞こえないように大きく口を開けて言いました。これからも「いいかげんなことはしないぞ、途中でなんかやめないぞ、何だっで最後までがんばるぞ」とやはり大きく口を開けて言いました。でもその声はだれにも聞こえなかったようです。